

巻頭言

留学生センター長 松岡 弘

創刊号を刊行したのがつい昨日のこのように思われるのに、時は駆け足で走り過ぎ、第2号の原稿提出を督促される日が来てしまった。創刊号が出るまでに相当時間がかかったことを考えると少しあっけないような気もするが、つまりは紀要の刊行が軌道に乗ったということであろう。

軌道に乗ったといえば、1998年度は「学術日本語シリーズ」3点「教育研究シリーズ」2点を、さらにその他に教科書1点を留学生センターから刊行した（年報参照のこと）。すでに実際の授業等で利用されているが、一橋大学での新たな試みの成果として、多くの方々にも読んで頂き、ご批判を賜りたいと思う。

懸案の留学生センターの建物であるが、学長、並びに大学執行部のご尽力によって言語社会研究科との合同棟として1999年度中に東キャンパスに完成することになった。これにより、言語関連分野の大学院生と日本語を学ぶ留学生とが同じ建物の中で交流を重ねながら勉学するという環境が整った。日本人と留学生とが分け隔てなく対等に学べるのが留学生教育の理想であり、合同棟の完成でそれがさらに充実することは間違いない。

一橋大学の留学生センターの特長といえば、4学部の留学生専門教育教官全員が留学生センターの兼任教官として全留学生を相手に仕事をしていることである。本年度は入れ替わりがあり、商学部と経済学部で新任の留学生専門教育教官を迎えたが、これまでの協力体制が微動だにしないことは、また嬉しいことである。

センターの担当する留学生教育は半年間の集中「日本語研修コース」の実施を筆頭に、学期間の補講クラスを含めると実にさまざまなレベルとクラスがあり、その内容も多岐にわたっている。専任の教師だけでは対応できない規模であるが、これを支えて下さっているのが非常勤の先生方である。創刊号に引き続き、今号にも非常勤講師からの投稿を頂いた。今後とも教育研究の両面においてご協力をお願いし、成果の発表の場としてこの紀要を利用し、かつ盛り立てて頂きたいと思う。

以上、センターの活動と「留学生センター紀要」の刊行が軌道に乗って走り出していることをご報告し、次の飛躍に向け初心忘れずの気持ちを新たにしている次第である。

1999年7月

追記

一橋大学留学生センターは、学内共同利用教育研究組織として1996（平成8）年5月に設置され、以来1999年5月で3年の歴史を刻んだことになるが、4月1日をもって人事、並びに組織の上で以下に述べるような変動があったので、ここで報告しておきたい。

まず、センターの2部門の中の日本語教育部門の3名（1名はセンター長を兼ねる）がセン

巻頭言

ター発足の際の経緯により 1999 年 4 月 1 日付で学部配置替えとなった。これに伴って生じた 3 教官ポストのうち、1 つは学内措置による採用人事分をこれに切り替え、残り 2 ポストに専任講師（西谷まり氏と石黒圭氏）が新たに採用された。

また、社会学部の留学生専門教育教官であり、同時にセンターの兼務教官として日本語教育を担当した杉田くに子専任講師が 1998 年 9 月末に退職した。そして、1998 年 4 月以来空席となっていた商学部留学生専門教育教官（講師）に岡野宏氏が任用され、1999 年 4 月に本学に着任、センター兼務となった。

留学生センターの教官組織はセンター専任教官（6 名）と兼務教官（留学生専門教育教官と学部配置教官）とで構成され、センター発足の時より「留学生センター連絡会議」を毎月行ってきたが、これを発展的に解消し、1999 年 4 月 1 日付で「留学生センター教官会議」を正式に発足させた。センター教官会議は、「センター運営委員会」の基本方針や決定に従って、センター長を議長とする定例会議を毎月開催し、センターの具体的な活動計画を策定し、実施する役割を担うことになった。

なお、センター長については、1998 年 4 月付で松岡が再任された。（任期 2 年）

＜センター教官の配置替え・採用一覧＞

今村和宏	経済学研究科助教授に配置替え	センター兼務	1999 年 4 月
三枝令子	法学研究科教授に配置替え	センター兼務	1999 年 4 月
松岡 弘	社会学部教授に配置替え	センター兼務	1999 年 4 月
西谷まり	留学生センター専任講師に採用（前・経済学部講師）		1999 年 4 月
石黒 圭	留学生センター専任講師に採用		1999 年 4 月
岡野 宏	商学部専任講師（留学生専門教育教官）に採用	センター兼務	1999 年 4 月
永井由香	経済学専任講師（留学生専門教育教官）に採用	センター兼務	1999 年 7 月 以上